

アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

中国における近代ナショナリズムの受容とネーションの想像

一章炳麟・梁啓超及び孫文のナショナリズム論を中心に―

国際関係学専攻 4004S3035 Huang Bin 黄 斌

主指導教員 天児 慧

Keywords : 中華民族, ネーション, ナショナリズム, 章炳麟, 梁啓超, 孫文

中国は試行錯誤しながら、伝統的な王朝専制国家から中華民族を主権者とする国民国家へと脱皮しつつあった。ただこの歴史的な変身は、未だに完全に実現したわけではない。近年、様々な深刻な社会問題を抱えている中国では、国民の間で遠心力と求心力の拮抗はエスカレートする一方である。旧ソビエトのような国家分裂危機を回避し、中華民族のもとに国民統合をうまく実現することができるかどうかは、中国の将来に関する最大の懸念事項の一つといえよう。

理論的には、ネーションの出自に対する異なる理解によって、その行方に対する予測も大きく変わるので、ここ百年来の中国の政治変容を理解するためにも、今後の展望するためにも、長いパースペクティブで「中華民族」の出自を掘り下げる作業が必要不可欠である。しかし、「中華民族」の出自に関する系統的な研究は 1980 年代末からようやく始められ、先行研究の蓄積は極めて少なく、しかも問題点が多数存在していると考えられる。

そこで本研究では、「中華民族」という概念を最初に提唱した梁啓超や章炳麟、及び孫文のナショナリズム論の進化したプロセスや、ネーション像の模索の軌跡に焦点を当て、その変化を引き起こした要因を分析し、動態的な考察を行う。これは、「中華民族」はどのように生まれたかを明らかにし、さらに中国のナショナリズムの行方を探るための一助とするためである。

本論文の構成は五章からなっている。第 1 章は問題意識、理論の枠組み、研究対象、研究方法と先行研究を紹介する。第 2、3、4 章では章炳麟・梁啓超及び孫文のネーション像の模索の過程を追跡する。第 5 章ではこの三人のネーション像の模索の過程を比較し、そのエリート・ナショナリズムという共通の特徴を分析する。さらに彼らの描いたネーション像の接近・固着の原因を考察する。以上の考察を通して、次のような結論に達した。

第一に、ネーションとしての中華民族は近代に生まれたものである。

これは「中華民族」という名前が梁啓超によって作り出されたためだけではなく、ネーションの存在に必要不可欠の二つの要素、即ち「対外的な国家主権の観念」と「対内的な人民主権の観念」は近代になって初めて梁啓超らのエリートたちに受容されたものだからである。現在の「中華民族」というネーションの輪郭や文化的な特徴なども、章炳麟・梁啓超及び孫文らのエリートたちによって描き出されたのである。「中華民族は歴代の王朝と中華民国を繋ぐ歴史の連鎖である」というような考え方は、昔からあったものではなく中華民族というネーション像が固着してから、歴史が見直され、ネーションの枠内に再編された結果生まれた考え方である。

第二に中国のナショナリズムは内発的な政治理念ではなく、主に日本を介し西洋文明より受容されたものである。

章炳麟・梁啓超及び孫文はいずれも海外滞在中に、ナショナリズム論を形成した。伝統的な「族類」思想は彼らのナショナリズム論に影響を与えたが、決定的な役割は果たしていない。彼らは西洋文明を摂取したとき、主に日本を介し受容したので、日本のナショナリズム論は彼らに大きな影響を与えた。そのためナショナリズムに関する重要な概念、例えば民族・国粋・国学などの和訳はそのまま中国語に逆輸入されたのである。しかも中国に対する日本人の他者認識や中国観は彼らに受け入れられ、その自己認識に転化した例が少なくない。そしてネーション像模索の初期、彼らは日本をモデルとし、文化的に均質化されたネーション像を目指した。さらに彼らのネーション像模索に、当時、日本で台頭していた国家主義や軍国主義などのナショナリズム

論が大きな影響を及ぼした。

第三に中華民族というネーション像の固着は、列強の外部規定によるところが大きい。

章炳麟・梁啓超及び孫文の描き出したネーション像は、最初はそれぞれ異なっているが、その後、次第に接近し、最後にはほぼ一致している。その要因には、ナショナリズムや時局に対する認識の深化があるが、国内外情勢の変化という原因もある。列強は領土保全と表明しつつも、実際にはモンゴル・チベット・満州・新疆で急速に勢力を拡張し続けた。章炳麟や孫文のなかで中国の周縁地域の喪失に対する危機意識が高まり、周縁地域のエスニック・マイノリティを早急に融合し一つのネーションに結成すべきであるとの主張を行うようになった。

第四に章炳麟・梁啓超及び孫文に代表された中国のエリート・ナショナリズムには少なくとも三つの特徴がある。

一つ目はネーションの共通の文化や苦楽を共にする歴史の記憶の欠如である。二つ目は信念の欠如である。三つ目はネーション像が個人の学識・体験や性格に左右されやすいということである。

第五に章炳麟・梁啓超及び孫文らのナショナリズム受容やネーション模索の原動力は危機意識である。だがその危機意識を政治改革につなぐ架け橋は「経世」思想である。

章炳麟・梁啓超及び孫文の場合、列強の略奪や分割に対抗するため、少なくとも次のような過程が共通して見られる。まずは危機意識という本能の出現である。この危機意識は「経世」思想のもと、社会改革の欲求に転化される。こうした欲求はまた、ナショナリズムの受容をもたらした。さらに彼らは受容されたナショナリズムを中国に当てはめ、試行錯誤をしつつ中国のネーション像を模索した。そして、彼らがそれぞれに描いたネーション像は国内外の情勢の制約のもと最終的に類似したものに固着することとなった。

【主要参考文献】

Ernest Gellner, Nations and Nationalism, Basil Blackwell, Oxford, 1983

Joseph R. Levenson, Liang Chi-chao and the mind of modern China, London: Thames and Hudson, 1959

汪榮祖『章太炎研究』李敖出版社、1991 年

張朋園『梁啓超と清季革命』中央研究院近代史研究所、1964 年

西順蔵・近藤邦康編訳『章炳麟集―清末の民族革命思想』岩波書店、1990 年

狭間直樹編『共同研究梁啓超―西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999 年

費孝通編『中華民族多元一体格局』中央民族大学出版社、2003 年

藤井昇三『孫文の研究：とくに民族主義理論の発展を中心に』勁草書房、1966 年

ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、株式会社リポポート、1987 年

松本ますみ『中国民族政策の研究―清末から 1945 年までの「民族論」を中心に―』多賀出版株式会社、1999 年